

巻頭言

「心の情報化」、「心の国際化」帰国子女教育の現場に必要なもの

坂田 直三（同志社国際中・高等学校長）

現代は情報化の時代、国際化の時代といわれている。ある朝、衛星放送で我が野茂投手が投げるドジャースとブレーブスの試合を観ていた。アメリカメジャーリーグの試合といえば遠い海の彼方の出来事であるが、今は中継放送で茶の間で観られる。試合は野茂の好投でブレーブスを零点に抑え応援しているドジャースが勝った。

やれやれと思っていると突然電話が鳴った。受話器を取るとアトランタにいる友人からの電話であった。彼は、当然、アトランタをホームタウンとするブレーブスの大ファンである。 Congranchureiションで話は始まったが、次の対戦の時は「野茂をノックアウトしてやる」というセリフで終わった。情報化の時代とは、日本とアメリカ合衆国で一つの出来事を共有することができ、そして両国に住む二人がその出来事について話し合えることができる時代である。この情報化の時代にあっては、国という単位を超えて、個人と個人との関係が大切になる。なぜなら家庭に、学校に世界の出来事が瞬時に伝わるし、共有した情報をめぐって世界中の友人たちと会話をはずませることができるからである。

このような情報化の進展は、人の国際化を一層進めることになる。具体的に言うと、世界の隅々までの付き合いの範囲の拡大、共有した情報についての意見の交換を瞬時にできるという意味での時間の短縮を可能にする。情報化の時代にあっては、語学力を要求されることは当然だが、それにもまして自分をはっきり相手に伝える力が必要だし、また相手の話をしっかりと聞き、相手を理解しようとする気持ちが大切だと思う。自分をはっきり相手に伝えるためには、自己を確立しておくことが肝要で、これは中央教育審議会が最近出した答申の「生徒が主体的に考え、行動する力」すなわち「生きる力」が必要となる。自分をはっきりと相手に伝え、そして相手を理解するための相手の話すことをしっかりと聞くことを私は「心の情報化」と呼びたいし、また情報化の進展に伴って「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」という聖書の言葉（ローマ信徒への手紙 12章9～17節）を実行できる「心の国際化」が必要になると思う。この「心の情報化」と「心の国際化」は、帰国子女教育のエッセンスであると同時に、帰国子女教育を行う現場は、他の現場に比べて異文化を体験した生徒が多いだけに実行しやすい環境にあるといえる。この環境を活かすか否かは一人の教員のマインドにかかっていると言える。帰国子女教育にはいろいろな学問的な議論や説もあるが、現場にあつて考えると帰国子女教育の現場で一番大切なものは全ての教員が一人一人の生徒に対して「SYMPATHYの気持ち」を持つことだと思う。一般に「SYMPATHY」という言葉は「同情」と訳されるが、私はニュアンス的には「生徒の立場に立って生徒のことを考える」意味に使いたい。教師は生徒の異文化体験を「共感」できる SENSIBILITY を持つべきだし、それを可能にするための努力を日々行うべきである。また学校は教師に対して研修の機会を与える必要がある。

「帰国子女教育を考える会」は、教育現場、保護者、研究者、企業の教育相談員、そして帰国子女自身などの帰国子女教育をいろいろな切り口から考え得る人々の集まりであるので、教師にとっては格好の研修の場でもある。もっともっと多くの教育現場に在る人の参加を望みたい。